

古典

巡礼

* 春雨物語

ささげえとした空気が、薄暗い穴の中に漂っていた。

諸国巡礼の一行者、禅海が30年もの年月をかけて手掘りした「青の洞門」(大分県中津市本耶馬溪町)。そこには今も、生々しい鑿跡が残っていた。人々の行く手を阻む山国川沿いの岩の崖を穿ち、全長342呎、トンネル部分144呎の道が完成したのは江戸中期 明和元年(1764年)のことだ。

かくて月日をへ、年をわたって、凡一里がほどの赤岩を打ちぬき、道たひらかに、所々岩窟をぬぎ、内くかららず

同時代に生きた大坂の歌人で

国学者、作家でもあった上田秋成(1734~1809年)は、『春雨物語』のなかの「編」

「捨石丸」で、洞門のことをそう描写した。鑿道の史実に、仇討ち話を絡めた物語だ。

主殺しのぬれぎぬを着せられ、陸奥から豊前(大分)まで逃げた捨石丸。主の長男である小伝次は無実を知りながら、国守に命じられるまま仇討ちの旅に出る。2人が再会したとき、捨石丸が掘り進めていた洞門の完成は目前であった、という筋立てだ。

「でも、この『捨石丸』という物語があることは、地元ではほとんど知られていません。そう明かすのは、ポランティアガイドを務める元小学校教諭、中島和貴さん(69)だ。たしかに、

「青の洞門」を広く世に知らしめたのは、『捨石丸』ではなく、大正8年(1919年)に発表された小説家菊池寛の代表作『恩讐の彼方』だろう。それは、当然のことでもあった。じつは、完全な形の『捨石丸』を収めた『春雨物語』写本が初めて伊勢神宮の元大宮司宅で見つかったのは、『恩讐の彼方に』に遅れること32年、1951年のことだからだ。それまでは、『捨石丸』が欠落しているか、断片的な写本しかなかった。ということは、『恩讐の彼方に』と『捨石丸』はほぼ同じ筋立てながら、菊池が『捨石丸』を下敷きにしたのではないという事にもなる。

「史実は別にして、寺の説教話として古くから、洞門と仇討ち

近代的人物像を造形

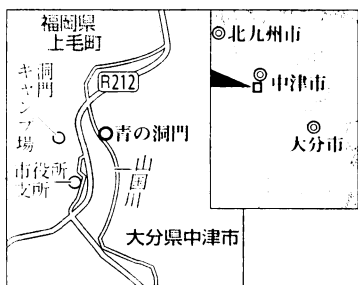
ちを結びつけた物語が伝わっていたようです。それが秋成の耳に入った可能性があるのでないか」と中島さん。明治末期からは地元観光案内記にもそうした話が紹介されており、菊池はそれを基に書いたともいわれる。一つの物語が偶然にも、100年の時を隔てて2人の大作家を魅了し、創作意欲に火をつけたのだ。

再会した捨石丸と小伝次。捨石丸は首を差し出そうとするが、無実の身ながら主の供養と人々のために洞門を掘り抜こうとするその姿に小伝次は心動かされ、手助けを申し出る。

国守の仇討ちの命に背いて家が滅ぼされるのも覚悟で、捨石丸とともに洞門を完成させるのだが、仇討ちを忠孝の大義、美德とした当時であってこれは受け入れがたい結末であったのだろう。写本を残した竹内弥左衛門という人物は、『捨石丸』など2編を「不快で憎むべき話」として外したとさえ記している。

「捨石丸」の完全写本の発見が遅れた理由の一つでもあろう。家の面目ではなく、自らの意思にもとづいた小伝次の行動のかもしれない。秋成は、因習を克服し、自ら道を切り開く近代的な人間像を造形したともいえよう。それは、当時人気を博した曲亭馬琴らの「勧善懲悪」のステレオタイプの物語や人物造形とは一線を画すものだった。

研究者の木越治・上智大教授



(近世文学)は「解釈の可能性を持たせ、『深読み』のできるところが、秋成文学の特徴であり、おもしろさ。それは、当時の文学作品からすると圧倒的に新しい、『近代的複雑さ』と言いつてもできるものだと思います。」

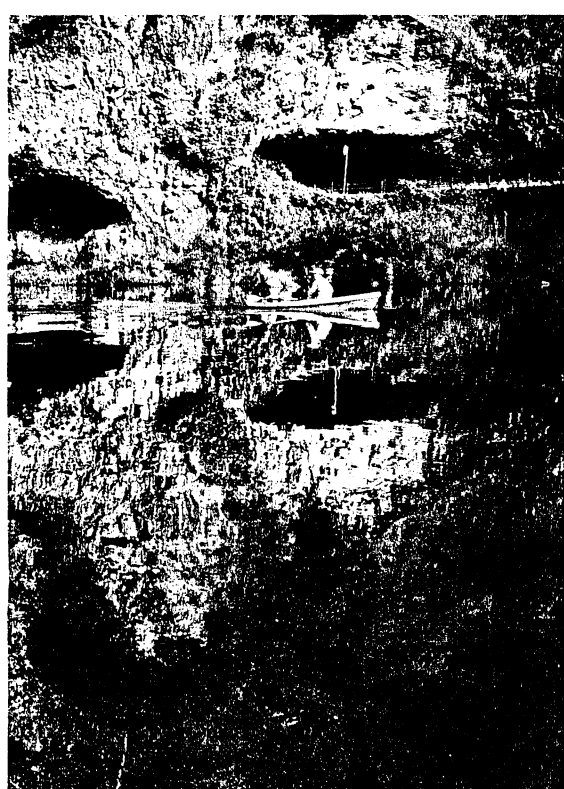
『春雨物語』のなかの別の1編「海賊」に、人筆、人を刺す。又人にささるれども、相共に血を不見(血は流れなくとも、ものを書くということには人を刺し、刺される力がある)というくだりがある。

この言葉のように、秋成は随筆集のなかで、社会に鋭い目を向け、儒者、仏教などの伝統的なものをなで切りにした。その徹底した批評精神こそが、秋成の近代性であり、作品を支えたものなのかもしれない。それは時代にあつては異端であり、秋成本人がそのことをだれよりも自覚していたにちがいない。秋成は蟹を意味する「無腸」と号し、生前に蟹の形をした台座の墓まで用意した。「人皆縦に行けば 余独り横に行くこと蟹の如し」(人はみな縦に歩くので、横に歩く自分はまるでカニのようだ)と言っただけで、なかつたともいわれている。(白石知子、今回で連載は終了します)

家の面目より個の意思

伝えなどに取材、物語に人生観、歴史観、教養観なども仮託する。刊行はされず、写本で伝えられた。秋成にはほかに伝奇物語の名作『雨月物語』(1776年刊)がある。

注釈、現代語訳付き『新編日本古典文学全集』(小学館)、注釈のみの『新潮日本古典集成』(新潮社)など、主な古典全集に収録されている。角川ソフィア文庫は原文、注釈、現代語訳、三弥井古典文庫は原文、注釈付き。現代語訳には、石川淳の『新釈春雨物語』(ちくま文庫)などがある。



めものがたり) 短編10編からな歳月をかけ文化成立したとされ作。史実や言い